霧の中で待つ少女

へべれけ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
霧の中で待つ少女

【Ｎコード】
Ｎ３３３１Ｚ

【作者名】
へべれけ

【あらすじ】
深い霧に包まれたとある場所。
そこにはひとつの駅があった。
あたりには何もない。
そんなところで一人の少女がとある人を待ち続けていた。
「おかあさん、おかあさん」
そう呼びながら。

少女（前書き）

初めての投稿です。
まだまだ稚拙な文ですがよろしくお願いします。
感想、批評など、どしどし下さい。

少女

第一話　少女

「おかあさん、おかあさん」
白いもやが一面に広がっているとある場所。
見渡す限り、辺りは白一色で何も見えない。
しかし、その中にさびれた駅とその前に線路が敷いてあるのが見えた。
どこからともなく聞こえてきた幼い声。
それは少女のものであることが予想できる。
ポォーン　ポォーン・・・
何か、跳ねる音が辺りに響わたる。
その音は、駅の小さな影から聞こえてくるものであった。
ぽぉん　ぽぉん・・・
規則的に響き渡るその音は、駅にいる少女がボールを跳ねさせているものであることが分かった。
「おかあさん、おかあさん」
ボールを付きながら自分の母の名前を呼び続けている少女。
髪の毛は眉の上できちんと整えられている、いわばおかっぱ。
そして花柄の模様が描かれている着物を着ていた。
そんな、座敷わらしのような女の子が規則的に母を呼びつつ、ボールを付き続けていた。
・・・
そんなことを続けてどれくらい経ったであろうか。
少女はバウンドしてきたボールの勢いを吸収するように自分の胸元に抱えた。

そして、後ろにいるベンチの影に向かって言葉を投げかける。
「ねえ、おかあさんまだかなあ」
振り返り、くりっとした大きな目でベンチの影を見つめる少女。
その目線の先には、茶色がかった帽子を深くかぶった、スーツ姿の男性が座っていた。
だが、深くかぶっているためかどんな顔をしているのか分からない。
しかし、両手を杖で支えながら少し前かがみに座っているその姿は、人を寄せ付けがたい、そんな雰囲気を感じさせた。
その男性は少女の言葉に対して少し身じろぎをした。
そして、
「まだ、だろうなあ」
と、少ししゃがれた声で応えた。
「そっかあ」
その、のんびりとした声を聞いた少女はまた、敷いてある線路の方を向きボールを付き始めた。
「おかあさん、まーだかな
おかあさん、はーやく、こないかな」
ボールのリズムに合わせて歌いながらつぶやき続ける。
姿だけ見ると、小さい女の子がただお母さんの迎えを待っている、そんな印象をうける。
しかし、周りに全く何もない、白い霧に包まれている駅で、ボールを付き続けるその姿はとても異質なもののように感じられた。
少女にとって。
ここがどこだか全くわからない。
気が付いたら、たくさんの人が乗っている電車に乗っていて。
気が付いたらこの駅に下ろされていた。
ただ、電車に乗る前に、誰かの泣いているような顔を見た気がした。
胸の中につっかかるような感覚。
そんなものを抱えながら訳も分からないまま、この駅に下ろされた少女。

これからどうすればいいんだろう。
そう思って、一緒に電車から降りてい駅の下り階段へと向かっていく人々に付いていこうとした。
しかし。
おかあさんに会いたい。
なぜか、そんな気持ちが胸からあふれそうになった。
おかあさんって何だろう。
自分にとってのおかあさんって何だろう。
全く思い出せなかった。
でもなぜだかわからないけど。
おかあさんのことを思いだそうとすると、胸が少しキュッとなると同時に。
温かい気持ちが広がるのを感じた。
とても心地がよかった。
会えたら自分どんなになっちゃうんかなあ。
そう思って、少し含み笑いをしたり、色々な自分にとってのお母さんの想像をしながら。
少女はこの駅で自分の母を待ち続けていた。
「は～やく、は～やく。
こ～ないかなっ」
歌を唄い終わった瞬間、少女は今までより少し強くボールを跳ねさせ、そして落ちてくるボールをキャッチした。
「おそいなあ」
そのボールを抱え込んでしゃがみ、少女は線路のずっと先を見つめる。
線路の先は白い霧で全く見えない、見えてもせいぜい１０メートル先ぐらいだ。
しかし、むしろそれは少女の豊かな想像力は加速させた。
一体どこまでつながってるんかな。
どこからきているのかな。

そんなことを考えながら、少女は前のめりになって自分の目の前の黄色い線を越えないように自分が来た方向を見つめ続けていた。
「・・・」
早く電車こないかな。まだかな。
早くお母さん来ないかな。まだかな。
そんなことを考えると、少女は自分の体がそわそわし始めるのを感じた。
もしかしたら、少女のボールを付き続ける行動というものは自分のはやった気持を抑えるための行動なのかもしれない。
（もういいや）
少女はそう思い、またボールを付こうとしゃがみこんでいた自分の身体をすっと起こして立ち上がった。
急に立ち上がったためか。
少女は立ちくらみを起こしてふらふらと身体がよろめいた。
そして、黄色い線を越えようとした、その時。
「いやあっ！」
少女はいきなり声をあげて線の外側へとしりもちをついて倒れた。
口をぱくぱくとさせながら、少女は線路を見つめる。
その目には怯えと恐怖の感情が浮かんでいるのが分かった。
あれ？なんでなんかな？
少女は大声をあげた自分にびっくりしていた。
とりあえず、立ち上がろうと両方の手に力をいれる。
しかし、足が震えて立ち上がることができなかった。
あれ？あれ？
なんで立てないんかな？
少女の頭の中にそんな疑問が浮かぶ。
それと同時に何だか泣きたくなるような、そんな気持ちに襲われた。
「・・・何で立てないんだよお・・・」
ぐっと力を入れても身体が言うことを聞いてくれない。
それが少女の焦りと不安を加速させる。

なんで立てないの？
なんでこんなにやな気分になるの？
そんな考えに苛まれている少女の前に。
いつの間にか、先ほどベンチに座っていた男性が黄色い線の上に立っていた。
その男性は深くかぶった帽子を少しだけ浅くしており、顔がちらっと見える。
顔はしわがたくさん刻まれており、たくさんのひげが生えていた。
大体、６０歳くらいの年齢であると推測できる。
そして、一番の特徴として。
その男性は瞳が青かった。
少女は怯えたようにその男性の瞳を見つめていた。
「おじいちゃん、そこ、危ないから
だめっ・・・だめだよお・・・」
少女は泣きそうな顔で初老の男性に懇願するように声をかける。
何で泣きそうになっているのか自分では全く分からなかった。
けれども、とっても怖くて、とっても嫌で、とっても痛い。
なぜだかわからないけど、そんな漠然とした思いが胸の中で自分を苛めている。
そんな気がした。
少女は、男性の足にすがりつくようにして引っ張って、線路から遠ざけようとする。
しかし、男性は全く動かなかった。
立ったまま少女を見下ろして、哀れんでいるのか悲しんでいるのかよく分からない複雑な表情を浮かべていた。
しばらく、泣きべそをかきながら引っ張ろうとする少女を見つめていた男性はしゃがみこんで、少女の頭を自分の胸へと寄せた。
「怖かったろう、大丈夫、大丈夫だ」
しゃがみこんだ男性のその表情には少女を安心させようとする、優しさに満ちているものがあった。

「だめだよお、危ないよお・・・」
「大丈夫、大丈夫」
男性は少女に言い聞かせるように優しく言う。
すると、徐々に少女の顔が恐怖から安堵の表情へと変わっていくのが分かった。
なんだろう・・・あったかいなあ・・・
少女は男性の胸になかでそんなことを思っていた。
なぜだか分からないけど。
だけど、今度はほっとしたせいか少女は目頭が熱くなってくるのを感じた。
だめ、すぐに泣いちゃだめ。
自分に言い聞かせて我慢しようとする。
我慢している少女の顔は膨れ上がったふぐのようで、男性は思わず吹き出しそうになったがここで笑ったらだめだとなんとか自分に言い聞かせた。
「我慢しなくていい、泣いてもいい」
前者の言葉は少女に投げかけたのか自分の本音を言ったのか分からなかったが、後者の言葉は間違いなく少女に向けてのものだった。
少女は自分が泣きそうなことを知られて、少しびっくりしたが、次の瞬間せきをきったように、涙が目からあふれ出した。
「う・・・うぅ・・・」
それを見られたくなかったのかどうか分からないけれども、少女は男性の胸の中に顔をうずめて、うめくように泣き始めた。
男性は少女の頭に手を乗せてやっていた。
「怖かったろう、もっと泣いてもいい」
「うぅ・・・怖かった、怖かったよぉ・・・」
少女の顔が涙でぐちゃぐちゃで、何を言っているのか聞くことも困難だった。
（あったかい）
そんなことを少女は思う。

なんだろお。おかあさんみたいだなあ。
するとさらに涙があふれてくる。
「怖い、怖かった・・・」
「大丈夫、大丈夫」
なんで、このおじいちゃんはこんなことをあたしに言ってくれるんかな？
考えたけれども、分からなかった。
なんで、あんなに怖かったんだろう。
それも疑問に思ったけれども、分からなかった。
なんで、あんなに嫌な気持ちだったのに、この人に抱きしめられるとすぐになくなったんだろう。
男性の胸の中で泣きながらそんなことを疑問に思っていた。
けれども。
（まあいいか）
そう思いながら、温もりを感じながら少女は男性の胸の中でしばらく泣き続けていた。

少女（後書き）

不定期更新になると思いますが、頑張って早く更新したいと思ってます。
ので、何卒よろしくお願いします。

二人。（前書き）

○月○日　　怖かった日
今日はなんか怖い日だった。
線路を越えようとしたときに・・・
なんでだろう
けど、怖かったけど
おじいちゃんが優しくて温かかった
なんであの人は温かいのかな

桐乃

二人。

「もう大丈夫なようだね」
初老の男性は自分の隣に座っている着物姿の少女に声をかける。
さっき泣きはらしていたためか、少女の目は少し赤かったが、今はもう楽しそうな顔をして先ほどとは違い、線路のつながっている先ではなく線路を横断した先を見つめていた。
その先はもちろん霧で見えないが、少女は楽しそうだった。
今、雨が降っている。
少女の目には霧にまぎれて降り注ぐ滴の固まりが落ちていくのが見えた。
「ねえ、何で雨って降るの？」
男性の労りの言葉を無視して、宙ぶらりんの足をブラブラさせながら聞く。
時折、足のすね辺りが見え、そこに何か傷のようなものがあった。
「うーむ、難しい質問だ」
少女の無垢な質問に対して悩む男性。
この霧に包まれた駅は時折雨が降る。
そのたびに2人で雨宿りをしながら、話をしたり、クイズを出しあったりしていた。
今の質問もクイズの一貫なのだろう。
少女はにこにこしながら男性の顔を見つめていた。
（さて、どう答えたものか）
雨が降る理屈なんて説明しようと思えばできる。
しかし、そんな理屈を少女に話しても面白くないであろう。
だから少女が驚くような斜め上の解答を男性は眉をよせながら必至に考えていた。
「・・・君はどう思う？」
「だめ！質問を質問で返しちゃ！」

解答に窮したため、少女に答えを聞こうと思ったのだが、一蹴される。
「・・・うむ」
結局男性はまた一から考えなおすはめになった。
ゆっくりと考え続ける男性。
そんな様子をじっと見ていた少女は、少し焦れたような表情になる。
「・・・じゅーう、きゅーう、はーち」
とうとう少女は待ち切れなかったのか制限時間を設け始めた。
この行為に男性は焦る。
しかし、少女をびっくりさせた時の顔を想像するだけで考える力が湧いてくる。
この少女は、斜め上の解答を出すと、とても目を輝かせて喰いついてくるのだ。
そんな少女の表情を見るのが、男性にとっての楽しみの一つであった。
いつも、母を待つ少女の顔が少しさみしそうだから、なおさらそう感じるのかもしれない。
「なーな、ろーく」
さて、どうしたものか。
そう思い考えていた男性はいきなりひらめいた。
「さーん、にーい、いーち」
そのタイミングは少女が制限時間の終了の合図を伝えた時とほぼ同時だった。
「・・・雨はな、誰かが泣いているから降るんだよ」
男性のその言葉を聞いた時、少女は少し意味がわからなさそうなほうけた顔をしていた。
「えっそうなの？」
男性の言葉に首をかしげる少女。
（ああ、やっぱり無垢だ）
男性はそう思う。

自分の想像通りのリアクションをしてくれたことに、男性は少し頬を緩めた。
そして、今度は自分の方から問題を出す。
「そうだ、お前が泣いた時に出るのは何だい？」
「えーと、えーと・・・涙？」
悩んだあげくそう答える少女。
「その通り、つまり今雨が降っているのはね、誰が泣いているからか分かるかい？」
「えっ・・・えっ？えーと・・・」
少女は楽しそうな顔から一転、難しそうな顔に変わる。
眉をよせ、あれこれ考えている少女の姿は男性にとってなぜか嬉しかった。
そして、いつの間にか立場が逆転していることに気づかない少女を見て男性はさらに頬を緩めた。

影

「十・・・九・・・八・・・」
今度男性の方が数え始める。
それをみてあたふたし始める少女。
男性はその様子を数字を数えつつ、少し微笑みながら見つめていた。

・・・
こうしているとあの時あの頃を思い出す。
あの楽しかった頃のことを。
あいつの年齢はこの子より少し上だろうか。
そんなことを考えようとする。
すると、男性の頭にズキリと鈍痛が走った気がした。
男性は軽く自分の側頭部を手でおさえる。
「大丈夫？おじいちゃん」
そんな様子を見逃さなかった少女は男性に心配したように言葉をかける。
「大丈夫。少し頭痛がしただけだ。・・・五・・・四・・・」
数え始めると、少女はまたあたふたしだした。
そうだ、ただの頭痛だ。
自分にそう言い聞かせる男性。
あの頃はもう戻ってこないのだ。
そんな在りし日に思いをはせて何になる。
男性は数字を数えながら自問自答する。
・・・自分はなぜこんなことをしているのか。
男性は一つ自分に疑問を抱く。
この子とクイズを出しあったり、勉強を教えてやったり・・・
自分は孫と目の前の少女の姿を重ねているのではないか。
孫は・・・死んでしまったというのに。

なのになぜ死んでしまった孫とこの子を重ねるのか。
疑問がさらなる疑問を呼び、男性の頭の中は徐々にぐちゃぐちゃになってくる。
（私は、電車から降りてくる人たちのようにこの駅の下り階段に向かうべきであったのではないか）
そう思って、男性は目の先にちらっと見える階段の段差を見つめる。
その段差は雨でぬれて、所々光沢を放っているように見えた。

・・・

「おじいちゃん　おじいちゃん？」
考えにふけっている男性に少女が心配そうな声をかける。
男性の表情はとても険しく、顔に刻まれているしわが二重三重となっていた。
「うん？　大丈夫だ。　少し考え事してただけだからな」
「そう、なんだ」
少女は何だか納得のいかなさそうな顔をしていた。
「それより、君の答えを聞かせておくれ」
少女に解答をうながす。
すると、少女は、はっとした顔になる。
その顔には充実感あふれるものがただよっているように見えた。
「うん、分かったよ！　答え！」
元気よく宙ぶらりんの足をバタバタさせながら少女は興奮した様子で言う。
「正解はね・・・空だよ！」
『正解は・・・空！』
元気よく答える少女。
しかし、それとは対照的に男性は信じられないというような顔をしていた。
「ねえ、合ってるでしょう？」

『どお、おじいちゃん』
男性は思う。
なぜあの子とこの子が重なって見えるのだ。
駄目だ、重ねてはいけない。
しかし、そう思っても先ほど見た自分の孫の幻影は頭に色濃く残って離れない。
少し長めの真っ黒な髪の毛。
そして目の前の少女と同じような大きい瞳。
また、同じような着物を・・・あの日彼女は着ていた。
そうだな
この子と孫はそっくりなのだ。
心の中で男性はそう思う。
「ねえ、答え教えてよ！」
今度はさっきのように孫が重なっている映像は見えなかった。
（そうだ・・・さっきのは・・・幻覚だ・・）
そう男性は自分自身に言い聞かせながら少女の問いかけに答える。
「いい答えだね、でも少し違うんだ」
在りし日に。
男性は同じような掛け合いを孫とした。
その時の答えは空、というので正解としていた。
だけど、今はなぜか違う答えが言いたいと男性は心の中で思った。
「正解はね・・・人なんだ」
「人・・・？」
男性の言葉に首をかしげる少女。
「そう。今世界には何十億人もの人がいて、その人々はそれぞれがいろんな表情をもっている。
怒ったり、笑ったり・・・そして泣いたりね」
すうっと息を吸い込む男性。
その行動は目の前の少女と孫の姿を重ねないように、落ち着けるためびしていると感じられた。

「泣いてる人が特に多い時は雨が降るんだ。
・・・もちろん心の中で泣いている人も含むね」
「へえ～」
少女はそう相槌をうったものの、実際の意味は分かっていなさそうだった。
でも分からなくていい。
この子には笑顔が似合うと男性は思った。
少女はまた眉をよせて口をきゅっと結び何かを考えていた。
「じゃあ、今雨が降っているのは」
少女は難しい顔をしながらつぶやく。
「おじいちゃんも、心の中で泣いているからなの？」
男性はその言葉を聞いた瞬間、心臓が少し跳ねあがりそうになった。
なぜ跳ねあがりそうなのか。
実際に泣いているからなのか。
「・・・分からないね」
男性にとって自分は今、どのような感情でこの少女と接しているのか分からなかった。
少女の顔から目を離し線路を見つめる。

外は・・・雨が降っていた

路面が濡れており、線路のレールが黄色い光のようなものを放っているのが深い霧をとおして見えた。

映し絵

『ねえおじいちゃん』
『空って青くて綺麗だね』
『私、生きてるうちに一回はあの遠くの空に行ってみたいなあ』

・・・私はわがままなのだろうか
少女の隣に座りながら思う。
この少女といることは、少なくとも居心地は悪くない。
むしろすごく心地よいものだ。
ただ。
自分は本当にこんなことをしていいのか。
死んでしまった後も、隣の少女と・・・七海の姿を重ねていていいのか。
本当は自分はこの駅に降りてくる人々のように、まっすぐに階段へ向かい、そして・・・
その先には一体どんなものが待ち受けているのか。
世に言う、血の池地獄のようなところがあるのか。
はたまた、花一面の美しい世界が広がっているのか。
そして・・・
大切な人が待っているのか。
死者は何を望み、この駅の階段を下っていくのか。
ふと考える。
けれども、それは本人にしか分からない。
もしかしたら、何も考えていないのかもしれない。
「おじいちゃん？」
少女が不思議そうに声をかけてきた。

その瞬間、自分の世界から現実の・・・霧の深いこの駅に戻された。
・・・何を考えているのだ自分は
そんなことを考えてもしょうがないではないか。
パンパンと気を取り直すため自分の両頬をたたく。
その様子を、少女はじっと見つめてくる。
そして、自分のまねをしたのか、少女も自分の頬をパンパンとたたき、私にニッと笑いかけて来た。
おそらく私の真似をして遊んでいるのだろう。
その仕草も、私の孫である七海とそっくりであった。
・・・この子は七海の生まれ変わりなのか。
ふとそんな馬鹿らしいことを考える。
しかしそんなことはあり得ない。
この駅は死者が訪れる場所なのだ。
この子も私も、現世ではいない人となっている。
だから生まれ変わりなどあり得ない。
だが・・・
あまりにも似すぎている。
だから影を重ねてしまっている。
こんなことをしてはいけないと分かっていても。
この子と七海の姿を重ねてしまう。
「・・・皮肉なものだ」
私にとってこれは救いなのか、はたまた罰なのか。
分からない。
しかし私はこの駅で七海を待ち続けなければいけない。
会うために。
そして、あの頃と同じようにまた一緒に笑いあうために。
だから、それまではこの少女に色々なことを教えてやらなければな

らない。

あの日。

この駅で自分が少女に救われた恩を返すために。

そして、私があんな風にならないうちに。

経緯

あの光景は忘れられない。
孫と一緒に横断歩道を渡ろうとして、車が突っ込んできて
その瞬間、車がまるでスローモーションのように見えた。
そして・・・
一瞬だけ身体に激痛が走ったのは覚えている。
しかし、気が付いた時にはたくさんの老若男女が乗った電車に乗せられていた。
それらの人々は、ほとんどが瞳がうつろで、話しかけても何も答えてもらえなかったのを覚えている。
「おじいちゃん、ここどこなの？」
隣にいる孫も一緒だった。
裾を引っ張り不安そうな目をしていた。
「さあ、分からないよ」
そう気丈にふるまってはみたものの、自分自身も内心不安でいっぱいだった。
なぜ私はこんなところにいるのか。
分からなかった。
私たちはとある駅で降ろされた。
そこは、霧の深い少し古さを感じさせる駅だった。
下ろされたものの、何をすればいいのか分からなかった。
しかし、一緒に降りた人たちは駅の下り階段へと、たどたどしく歩いていく。
私たちもあそこに行くべきなのか。
そう思ったが。
「・・・」
不安そうにしている孫が心配だった。
この子は大丈夫なのだろうか。

一緒に乗っていた人々の顔面蒼白の顔を見て怖くはなかったのだろうか。
「・・・大丈夫、私がついてるよ」
そう思い、私は孫の頭をなでてやった。
すると
「う、うん・・・」
と少し怖がりながらも私の裾を必至につかみながら答えた。
「とりあえず、あのベンチに座ろう」
私たちの前には少し古びた木製のベンチがあった。
私たちは何をすればいいのか分からなかったから、とりあえずそこに座って何の目的も持たず、とりとめのない話やなぜか持っていた、本やらを読んでやったりして2人でしばらく過ごした。
そして、とある日に・・・

この後のことは思い出したくない。
ただ、自分がその時に酷く意気消沈していたのは確かだ。
そしてしばらく茫然としてベンチに座り続ける日々が続いて。

あの座敷わらしのような少女がやって来た。

出会い（前書き）

沈みこんでいた気持ち。
それが、この少女によって緩和されたのはなぜであろうか。
少女と一緒にいる今でも理由は分からない。

出会い

その日は、雨が降っていた。
大粒の、当たるだけでも痛そうな粒が降っていた。
自分はそれを何も考えず茫然とみつめていた。
しばらくして、線路の向こうから黄色い光のようなものが見えた。
その光が徐々に近づいてくる。
そして、プシューっという音と共に電車が停車した。
ゆっくりと開くドア。
そのドアからはたくさんの人々が出てくるのが見えた。
無表情になりながら駅の下り階段へと向かっていく人々。
その中に。
一人の少女がいた。
その少女は辺りを不安そうに見渡しながら、雨を防ぐように頭に手を乗せ。自分の近くに小走りで近づいてきた。
そして、ストンッという軽い音とともに少女は自分の隣に座った。
・・・こんな子は初めてだ。
今まで、ここで見た限りでは電車から降りる人は一目散に階段へと向かっていくのに・・・
そう疑問に思い、ちらっと見る。
年齢は十歳くらいだろうか。
花柄の着物姿におかっぱの頭はまるで日本昔話にでてくる、座敷わらしのようであった。
少女は雨がふる様子をしばらくじっと見ていた。
するといきなり
「おじいちゃんは誰を待っているの？」
こっちの方に目をやらずに、雨を見つめながら聞いてきた。
・・・私は誰も待っていない。
ただ、ここにいるだけだ。

そう思ったが、口からは
「孫を待っているよ」
という言葉が出た。
なぜ、この言葉が出て来たのか分からない。
おそらく、私は孫のことをまだ諦めきれていないのだろう。
そして会いたいからであろう。
「そうなんだ、じゃああたしと一緒だ」
少女は顔だけこっちを向き、笑顔で言ってきた。
その少女深い黒の瞳は見るものを吸い込んでしまいそうであった。

何なんだ、この子は。

よく分からない子に話しかけられたものだと思った。
「あたしねー、お母さん待ってるんだー」
自分のことなど気にせず、足をパタパタしながら少女は話し続ける。
その少女は笑っていたが、少しだけ寂しそうな雰囲気を感じられた。
「君のお母さんはどんな人だい」
自分は気づいたら隣の少女に話の続きを促していた。
なぜだか分からなかった。
単なる好奇心なのかもしれないし、この子が人を引き付ける雰囲気を持っていたからかもしれない。
「・・・分かんないんだあ」
少女はそう呟いた。
自分にとって分からない人をこの少女は待っているというのか。
訳が分からなかった。
しかも更にびっくりしたことは
この少女が笑っていたことだ。
普通は忘れてしまっていたら悲しんだりするものではないのか。
自分の中で少女に対する疑問が膨らむ。
「悲しくないのかい」

自分のなかで疑問に思っていたことをそのままぶつける
こういうことを聞くのは酷かもしれないと思ったが、気づいたら口から言葉が出ていた。
少女は私の言葉に対し、眉をぎゅっと寄せて、難しい顔をしていた。
そして、
「分かんない」
そう答えた。
そうか、この少女は自分が大事なことを忘れているという自覚がないのか。
自覚があれば、悲しんだり、気が沈んだりするから。
自分の中で納得する。
「けどね」
少女は付け加える。
「来てくれなかったら、寂しいなあ」
少女は線路を見つめながら答えた。
この子は母親に対する漠然とした思いを抱えて、待っているのか。
そうだとしたら、それは不幸なことだと思った。
「ねえ、おじいちゃん」
少女は線路に向けていた目をこちらに向ける。
その深い黒の瞳は、見つめているだけで吸い込まれてしまいそうだった。
「おじいちゃんは、誰かを待っているの？」
「・・・待っていない、ただここにいるだけだよ」
「うそ」
ぴしゃりと少女に言われる。
「おじいちゃん、さっきからすごく寂しそうな顔してるもん。誰かに会いたいんでしょ。だからここにいるんでしょ？」
自分の心を見透かされているのか。
確かに、私はできるならば孫に会いたい。
しかし、それを初対面で雰囲気だけで見抜くことなどできるのだろ

うか。
「・・・そうだな、私はだれかを待っているよ」
なんだか、この少女の前では嘘がつけそうではなかったから、本音を言った。
すると、少女はびっくりとした顔をして、
「当たった・・・」
と呟いていた。
・・・益々この少女のことは分からない。
さっきのは勘だったのか。
一体この少女は何者なのか。
分からなかった。
ただ、待つということは確かに悪くない。
今まで、孫はもう階段の向こうから帰ってこないのではないかと、ずっとふさぎこんでいたが、そんなのは誰が決めたのか。
自分だ。自分の思い込みからだ。
そうだ、もう一回孫に会えないと決まったわけではない。
待とう。
階段の向こうへ行ってしまった彼女をここで待とう。
この少女と一緒なら、なんだかできるような気がしてきた。
自分は、少女に向かって少しだけ笑顔を見せる。
それに対応して少女も笑顔を返して、そしてこう言ってきた。
「じゃあ、一緒に待とうよ」

青年（前書き）

幸せ。
これを生きている時にもっと実感できていたらどれだけよかっただろうか。
私は死んでしまった今でも、幸せを感じてしまっている。
それを私は受け入れている。
そんな私を七海は受け入れてくれるだろうか。

青年

「あ、すごい！虹出てるよ！おじいちゃん！」
雨も小降りとなり、先ほどに比べて少し視界があける。
その先には、虹。
線路を横断した向こう側に大きな虹がかかっていた。
雨上がりのそれはとても美しく私もしばらく見とれてしまう。
桐乃は大きな虹を見て興奮したのかベンチから立ち上がって、できるだけ虹に近づこうと線路のぎりぎりのところまで走って行った。
『すごいね！あの虹！』
孫とここで一緒に見た虹。
それは自分の中では鮮明に色濃く残っており、今見ている虹とそん色ないほど頭の中に強く残っていた。
・・・この虹をもう一回、七海と見たいものだ。
しかし、そのためには待たなければならない。
「ねえねえ、おじいちゃんも来なよ！」
遠くで手を振っている少女。
私はこの子と幸せな時間を過ごせていると、実感する。
それが、七海に対して後ろめたい行為であることも。
・・・すまない、七海。
もう少しだけ、私に幸せな時間を過ごさせてくれ。
いずれ君が戻ってくるまで。
私は少しずつ、駄目になってきている。
最近考えようとすると時々、頭の中にもやがかかったようになって、ボーっとすることも多くなった。
いずれ、私も君と同じように自我を保てなくなるだろう。
それまでどうか。
桐乃との時間に幸せを感じている自分を許してほしい。

雨上がりのキラキラとした光沢を、地面の水たまりが放っている。
私はそれを見つめていた。
「・・・今行くよ」
この心地よい時間を自分はどれだけ実感することができるのだろう。
私はそう思いつつ、ゆっくりと立ち上がり、桐乃の元へと向かっていった。
「・・・すごいなあ」
桐乃は大きな虹をしゃがみこんで見つめていた。
「ああ、すごいね」
私がそう言うと、桐乃が虹を見つめつつ
「・・・私もあの虹に行ってみたいなあ」
そう呟いた。

カァーン・・・カァーン・・・
線路の向こうから、電車が走る音が聞こえてきた。
その方向をみると、黄色いぼんやりとした二つの光が近付いてくるのが見えた。
「あ！電車来た！」
その途端、桐乃の顔が明るくなる。
それはそうだろう。
あの電車にもしかしたら、母が待っているのかもしれないのだから。
桐乃は急に立ち上がり、電車が来るのを今か今かと待ち構える。
電車が自分たちから十メートルくらい近くに来た時に、桐乃は電車に向かって走り出した。
電車がプシューッという音とともに止まる。
そして、ゆっくりと電車のドアが開いた。
ドアから最初に出て来たのは四十代後半の天然パーマの女性だった。
一見普通そうに見えるが、その目はどこを見つめているのか分からない虚ろなものであった。
桐乃はその女性に。

「あの、お母さんはいますか？」
と声をかけた。
女性はそれに対して女性は桐乃を一瞥したあと、何も言わずに駅の下り階段へと、向かっていった。
そして、次の人が降りてくる。
今度は、三十代の男性だった。
桐乃はその男性に対して同じことを言った。
しかし、無視される。

お母さんはいますか。

桐乃は毎回電車が来て降りて来た人たちに必ず、そんなことを言う。
だが、大抵は無視されたり、少しだけ嫌そうな顔をされたりして何も言われず桐乃の求める解答は返ってこないのであった。
私はその様子を毎回見ていたため、ある日。
「声をかけるのは無駄じゃないのか？」
と忠告した。
しかし、私の忠告に対して桐乃は、
「・・・私から声をかけないとお母さん困っちゃうから」
そう言ってきた。
そう言う桐乃の表情からはとてもまっすぐな意志が感じられた。
なので、私は全く言い返すことができなかった。

それ以来、私は桐乃が電車から降りてくる人々に声をかけるのを見つめているだけとなった。
無視されても無視されても声をかけ続けるその姿は、とても健気で止めることはできなくなっていた。
「ねえねえ、おじいちゃん！」
何だかびっくりした様子で、電車のドアから手を振ってくる。
桐乃の近くに姿はよく見えないが、人影があった。

桐乃が私の方を指さす。
・・・誰かと話しているのだろうか
その人影は私の近くに徐々に近づいてきた。
それにつれて、どんな人物なのかが徐々に見えてくる。
黒くて短い髪の毛で清潔そうな青年だった。
上にはチェックのTシャツを着ており、下にはジーンズを履いていた。
なんなのだろうか。
その青年は私と距離が一メートルもない位置にまで来た。
さすがに霧が濃いとはいえ、よく見える。
その青年はなんだか、思いつめているような表情であった。
「・・・どうかしたのかい」
なんだか、言い淀んでいるようであったので、私の方から切り出す。
すると、青年は私の顔をじっと見た後、真剣な顔をしてこう言ってきた。

「あの、妹を知りませんか？」

過去　1（前書き）

『ねえお兄ちゃん』

『私の事、好き？』

過去　1

自分が１８歳の時。
両親が暴走車両に轢かれて死んだ。
そのことを自分はとある一本の電話から知った。
自宅の電話がけたたましく鳴っていた。
その時自分は３９度の高熱を出していたため、少しふらつきながら電話に出た。
『はい、もしもし』
『あの・・・青木さんのお宅でしょうか？』
電話口の向こうは四十代程の男性であった。
なんだか声が上ずっているように聞こえる。
それに。
電話の向こう側はなんだか騒がしかった。
『はい、そうですけど』
自分がそう言うと、電話口から少しだけため息が聞こえた。
『あの、落ち着いて聞いてくださいね』
この男性は一体何者なのだろうか。
警察なのか。
心の中で自分は疑問に思った。
そう言う男性の声は、やっぱり上ずっていてさっきに比べて少しだけ早口になっていた。
・・・だけど、その言葉を聞いた時、何だか嫌な予感がした。
向こう側の男性がゆっくりと深呼吸したのが聞こえた。
そして
『ご両親が亡くなられました』
そう告げてきた。

過去　2

自分が生きている両親の姿を見たのは、あの日の朝頃だった。
その日はみんなで、美希のお見舞いに行こうということになっていた。
しかし、自分はこの時たまたま風邪を引いていた。
『待ってよ、俺もいくよ』
意識が朦朧となりながらそう言った。
両親からみたら、俺の顔は熱で真っ赤になってるように見えただろう。
『ははは、これがどっちが病人か分からないな』
父さんは、明るくてあまり細かいことを気にしない人だった。
『駄目よ、今日は寝ていなさい。あんた受験生なんだから』
母さんは、心配性な性格で父さんとは反対に、心配そうな表情をこっちに向けていた。
その手には、美希に届けるためのパイナップルやリンゴの入ったソケットがあった。
『でも・・・』
母さんの心配そうな表情に少しだけ胸が痛む。
だけどなんだか、嫌な予感がした。
身体が寒い。
全身から、冷たい汗が噴き出てくるのを感じた。
『修一、そんなんじゃ歩けないから今日は家で寝ていなさい』
そう言いながら、父さんは玄関のドアを開け放った。
その途端に夏のむわっとした風が吹き込んでくる。
今日は快晴のようだった。
家の玄関へとつながるアスファルトの上に陽炎が立ち昇っているのが見える。
『大丈夫よ。また来週みんなで行けばいいじゃない』

母さんは優しい表情をしてそう言ってくる。
自分はその表情を見ると何故か、反論する気がなくなっていた。
父さんはちらっと腕時計を見る。
『じゃあ行ってくる』
そう言って外へと歩いて行った。
『安静にしているのよ』
母も外へと向かって行く。
その時に2人が並んでいる姿が遠く感じられた。
自分は何故か手を伸ばそうとしたが、届くはずもなく無情にもドアは閉められた。
・・・何だろう、何だか胸騒ぎがする
そう思って外に出ようとしたが、視界はぐらつき今の自分は立っているのもままならない状態であった。
頭がボーっとして倒れそうになる。
・・・寝よう
そう思って自分はゆっくりと部屋のある二階へと向かって行った。

ーそれから五時間程経ってからであろうかー
この電話が掛ってきたのは。
寝起きでまだ、頭の中がボーっとしていた。
そのためか、警官が何か言っているようであったが全く聞きとることが出来なかった。
ただ、先ほど警官が言った

両親が亡くなった

その言葉だけは鮮明に頭の中を渦巻き続けていた。
・・・何が亡くなっただ。
朝は2人ともあんなに元気だったじゃないか。
なのに死んだなんて。

意味が分からなかった。
いきなりそんなこと言われても、実感が湧かなかった。
しかし、それから数日後の葬式で。
現実を痛いほど見せられることとなった。
それは葬式の最後に死者に菊の花を添える時だった。
黒い棺が二つあり、親戚や友人がその周りに集まった。
それがゆっくりと開かれる。
そこには。
白装束を着て青白い顔をして眠っている母さんと父さんの姿があった。
それを見た時。
頭が真っ白になった。
そして風邪でもないのに視界がぐにゃりと曲がり思わず倒れそうになった。
両親の死。
それを実感させられた。
だけど心の隅で。
・・・この場に美希は居なくて良かったのかもしれない、とふと思った。

過去　3

葬式の後。
自分は母方のおじいちゃんとおばあちゃんの家に預けられることになった。
自分の家からも近いし、美希の入院する病院も近かったからだ。

預けられることになった日。

玄関先で俺の姿を見た途端、おじいちゃんとおばあちゃんは泣きだした。
『大丈夫かい、大丈夫かい』
そう言われた。
自分はこの2人のことが好きだった。
昔から、よく遊びに行くとお菓子をくれたり、自分の知らない色々な話をしてくれたりしたからだ。
だからこの2人が自分を心配してくれることはすごく、嬉しかった。
普通ならば、自分ももらい泣きしそうな場面だっただろう。

でも、今回は普通の精神状態じゃなかった。
胸の中にぽっかりと穴が空いたような。とてもむなしい気持ちでいっぱいだった。
だから自分はこの時、2人に対して、
『ごめん、少し一人にしてほしい』
としか言うことが出来なかった。

自分は今後どのようにしていかなければいけないのか不安だった。
ー目指していた大学はどうすればいいのかー
ーこの先どうやって、日々を過ごしていけばいいのかー

そして最後に妹の顔が頭の中によぎった。
ー美希をどう養っていけばいいのかー

この家にはただでさえ自分を養うので精いっぱいであることは分かり切っていた。
それに重なって美希の治療費。
到底払えるものじゃないだろう。
だけど、この事を2人に相談すると、絶対
『大丈夫、任せなさい』
と言うのは明白だった。

ただでさえ迷惑をかけるのは嫌なのに、その上自分は大学に行きたいだなんて
ー2人に言えるわけがなかったー

おじいちゃんとおばあちゃんは俺の気持ちを汲み取ってくれたのだろう。

『こっちに来なさい』
と言って、仏壇が置いてある畳六畳くらいの部屋に案内してくれた。
ふすまを開けた途端、蚊取り線香の匂いがした。
だけどこの匂いは自分を落ちつけてくれる、そんな気がした。
『ありがとう』
あの時の自分に言える精いっぱいの言葉だった。
2人ともその言葉に対し、少しだけ悲しそうな顔をしてふすまを閉めた。

・・・自分の周りには何もない。
けたたましい程の蝉の鳴き声だけが、自分の周りの空間を支配していた。

けれども、ここなら何故か落ち着いて心の整理ができる、そんな気がした。

・・・自分はこれからどう生きていけばよいのか。
そして、美希をどうやって養えばいいのか。
自分が考えないといけないことはこの二つだった。
だけどそのために自分がしなければいけないこと。
それはこの家に来る前から分かっていたことだった。
結論は既に出ていた。
ただ、それを実行するには少しだけ心の整理をする必要があった。
自分は正座をして目をつぶりこれからの事を考え続けた。

・・・どれくらい経ったであろうか。
ふとそう思って外を見てみると日は傾きかけて、橙色の光が自分を照らしていてまぶしかった。
蝉の鳴き声は微々たるものになっていたが、代わりにひぐらしの鳴き声がうるさい程聞こえてきた。
・・・来た時はまだ昼頃だったのに、もうこんな時間なのか。
俺は今夜2人に話すことを頭の中で反芻しつつそう思った。

過去４

蝉が鳴いていた。
けたたましく鳴き続けるそれは、玄関での会話をかき消してしまうのではないかと錯覚してしまう程であった。
ー本当にいいのかい？ー
叔父と叔母はあの日の夜に、自分が下した決定に対して心配そうに聞いてきた。
ーうん、大丈夫ー
自分は使い古されたママチャリに乗った。
サドルは真夏の太陽に熱されていたが、我慢して乗った。

あの日の夜。
自分は２人に就職の道へ進むことを話した。
２人とも最初は反対していたけれど、何とか説得した。
これしか、方法はなかったのだから。
そして、それを伝える家族が病院にいた。
・・・おじいちゃんとおばあちゃんの家から十五分程すれば着く距離だ。
ーじゃあ、行ってくるー
自分はそう言い、走りだした。
真夏の太陽が容赦なく自分を照りつけていた。
周りが田んぼのあぜ道をバランスを崩しつつ、走り続ける。
ー美希は絶対反対するだろうなー
そう思いながら。

十字路を左へと曲がり、住宅街へと入る。
そして、そのまま真っすぐ進めば病院へと着く。
何故か病院に近づいていく度に自分が息苦しくなるのを感じた。

自転車を漕いでいる影響もあるのかもしれない。
しかし、自分は直感でこれは精神的なものであると感じた。
美希に就職のことを言うのに気が引けていたからかもしれない。
あいつは俺が大学に行って教師になるという夢を応援してくれていた。
だから、あいつの応援してくれる気持ちを裏切るのが怖かったのかも知れない。

そんな事を考えつつ走っていたら、白くて大きいビルの様な建物が見えて来た。
あそこが美希の入院している病院だ。
徐々に近づいて行く度に足が鉛のように重くなるのを感じた。
流石に飛ばしすぎたか、そう反省しつつ病院の駐車場へと自転車を止める。
降りた瞬間、汗が間欠泉のように一気に噴き出てきて気持ち悪かった。
早く涼しさを感じたい、そう思って中へと入った。

過去の終わり

中に入ると、清涼感のある空気の固まりがどっと押し寄せてきた。
それは自分の汗だくの身体にとってとてもよいものであった。
辺りを見回すと、たくさんの人々がいた。
友人と楽しく話している天然パーマのおばさん。
ソファにゆっくりと腰をかけて新聞を読んでいるお爺さん。
何か考え事をしている女性。
それらを見て、何故か自分が場違いのような気がしたので、早足でエレベーターへと乗り込んだ。
確か美希の部屋は七階だっけな。
ドアの近くにあるボタンを押そうとすると、こっちに向かって走ってくる女性の姿が見えた。
慌てて開くボタンを押す。
『ありがとうございます』
女性はそう言って乗り込んできた。
良く見てみると、先ほど少し考え事をしていた女性だった。
『何階に行くんですか？』
『あの・・・七階でお願いします』
女性は息を切らしながら答える。
・・・自分と同じ階だ。
心の中でそう思った。
しかし、七階は結構思い病状の人がいる場所だ。
・・・誰か子供でも入院しているのかな
そう思った。
ゴーッっと音を立てながらエレベーターが上がって行く。
その間2人は無言だった。
汗臭くないだろうか。
そんな申し訳ない気持ちを持ちつつその場に立ち続ける。

『すみません、汗臭くて』
斜め後ろにいる女性に対して、振り返らずに言う。
すると、女性は
『そんなことないですよ』
と優しい声でフォローしてくれた。
『けれど、汗たくさん出てますね』
隣に来てハンカチを渡してくる。
ー七階ですー
機械的な女性の声が響いた。
その途端にドアが開く。
女性は
『ありがとうございます』
そう言って、エレベーターを出て走って行ってしまった。
渡されたハンカチ。
本当は受け取るつもりなんてなかったのだけれど、返しそびれてしまった。
・・・まあ、この病院でいずれ会うだろうしその時に返そう
そう思って妹のいる病室へと向かう。
真っ白で清潔そうな廊下を歩いて行く。
少しだけ光が反射して、廊下に自分の姿が朧げに映るのが見えた。
時折、松葉杖をついて歩く人や、車椅子をを引いて進む人とすれ違う。
やっぱり、美希は重い病気なんだな。
改めて実感させられる。
額からは汗が噴き出ていた
自分はさっき渡されたハンカチを無意識に使いながら進む。
そして
『あった』
７１６号室
青木　美希

そう書かれた札が壁に張り付いていた。
その途端に気が重くなる。
両親のことをどう話せばいいんだろう。
そのことで頭がいっぱいになった。
コンコンとドアをノックする。
だけど、部屋の中から声はしなかった。
スライド式のドアをゆっくりと開ける。
部屋の中には小さなテレビや、雑誌やらが入っている本棚があった。
そして、美希の大好きな向日葵の花が花瓶に入れて置いてあった。
ベッドには誰も居なかった。
今検査中なのだろうか。
そう思って、適当な椅子を探している時、ドアが開いた。
その先には
『お兄ちゃん・・・？』
入院患者が来ている白いパジャマを着た美希が立っていた。
目の辺りが少しだけ赤かった。
『よお』
できるだけ明るく妹に声をかける。
『来てくれたんだね・・・』
点滴の器具を引きづりながらゆっくりとベッドへと歩いていく。
そして、ベッドの端へと座った。
自分は妹と向かい合う形になるように椅子を持ってきて座る。
・・・
辺りを沈黙が包んだ。
蝉の鳴き声が微かに聞こえてくる。
どう話せばいいんだろう。
そう悩んでいると、美希は泣きそうな顔になりながら俺の胸元にうずめてきた。
『・・・心配したんだよ？』

『ごめんな、早く来れなくて』
俺がそう言うと、妹はぶんぶんと頭を横に振る。
そして、
『う・・・うぅ・・・』
とうめくように泣き始めた。
俺は美希の頭に手をそっと乗せてやる。
『本当に、死んじゃったの？・・・』
俺の顔を見上げて聞いてくる。
『うん、暴走車両に轢かれた・・・んだって』
今の自分に言えることはこれが精いっぱいだった。
『そう。なんだ・・・』
美希は俺の胸辺りにまた顔をうずめる。
少しだけそこが湿っぽかった。
・・・泣いているのだろう。
自分は死んだことを聞いた時に、何故か涙を流すことが出来なかったから。
少しだけ、羨ましく思った。
『私・・・心配だった・・・お兄ちゃんも死んじゃったんじゃないかって』
『大丈夫、大丈夫だ』
頭を撫でてやる。
『あ・・・うぁ・・・』
美希は少しだけ安心したのか更に泣き始めた。

１８歳の自分と１４歳の美希。
この、二年前の自分たちにとっての両親の事故は、とても厳しい現実を突きつけられるものだった。
そしてこれからも更なる辛い現実が容赦なくやって来ることを予知していた。

だから自分は
　　これからは2人で生きていくのだから、妹は俺が守ってやろう
そんな固い決意を胸に誓い、自分は泣いている美希の傍に居続けた。

異質

ここはどこなのだろうか。
辺りを見回すと周りに色々な人がいた。
つり革に捕まって外を見ている人。
椅子に座って新聞を読んでいる人。
しかし、これらの人々には共通して生気というものが感じられなかった。
ゴトンッと揺れる。
長く伸びる椅子に自分は座っており、その隣におばさんが座っていた。
どうやらここは電車の中のようだ。
・・・なぜ俺はここに
確か自分は美希と一緒に外を散歩していたはずだ。
『ねえお兄ちゃん』
美希が確か・・・
『私の事、好き？』
美希の車椅子を引いていたら見上げるようにして、そんなことを聞いてきたんだ。
そうだ、自分は街中で散歩していたはずだ。
頭の中を整理するために、前に自分がしていたことを思い出そうとする。
『～ない？』
『～め～ね？』
しかし、何故か会話の一部分に靄が掛ったようにカモフラージュされて、全てのことを思い出すことができない。
必死に頭をフル回転させる。
だが、横断歩道を渡る前にしたあの会話だけ、思い出すことができなかった。

・・・何でだ
そもそもここはどこなのだろうか。
そう思って外を見る。
だが、白い霧のようなものが深くかかっていて山や川といった景色が何も見えない。
外は雨が降っているようであった。
雨の滴が光を反射して、時折霧の中にキラキラとした星のような輝きをもたらしていた。
・・・どこなんだここは
益々疑問が深まる。

〜次は××駅〜

車内に無機質な女性によるアナウンスが響いた。
しかし、全部を聞きとることはできなかった。
・・・どうしようか。
何をすればいいのか、分からなかったのでとりあえず隣のおばさんに聞いてみることにした。
「あの、すいません。この電車はどこに向かっているのでしょうか」
すると、俯いていた女性はゆっくりと顔をこちらの方へと向けた。

その顔を見た瞬間。
自分の中に意味の分からない悪寒が走るのを感じた。
俯いていた女性の顔は

瞳孔が開いており、顔色は青白く唇が紫色だった。

本当に生きているのかと一瞬目を疑った。
しかし、現に顔をこちらの方に向けているのだ。
死んでいるのはあり得ない。

だが、まるであの時に見た両親の顔のようなー
そんなことを考えようとした時
ズキリ
と頭に鈍痛が走った。
「〜っ！？」
何だ？いきなり。
その痛みに思わず自分はその場でうずくまりそうになる。
しかし、その痛みは一瞬だった。
痛みはすぐに頭の中から消え去る。
・・・何だったんだ。今までこんなことなかったのに
分からなかった。
ただもう一度両親の死んだ時の顔を思い出そうとすると、
顔の部分にだけもやがかかったようになって、分からなくなっていた。
「・・・」
女性はこちらの方を焦点の合わない目で見つめてくる。
口は半開きになっており、少しだけ恐怖を感じた。
「あの、僕・・・僕たちは街の中を歩いていたんです
　確か○○病院の交差点を」
そう言いかけて、自分はふと気付く。
・・・美希はどこに居るんだ？
さっきまで一緒に居たはずなのに。
辺りを見回す。
しかし、美希らしき姿はどこにも見当たらなかった。
この異質な空間に一人でいる孤独と不可解な出来事に対する謎。
それが益々自分の不安を加速させた。

〜間もなく、停車致します〜

ピンポンパンポーンという音と共に、機械的な女性の車内アナウン

スが流れる。
線路のレールから、キキキキッという金属同士が触れ合う音がする。
もうすぐ停車するのだろう。
だけど、停車したとして自分は一体どうすればいいんだ？
ここで降りるべきなのか、はたまたこのまま座っているべきなのか
・・・上手く頭が回らない。
さっきからよく分からないことが起きすぎていて。
ふと、外を見た。
さっき降っていた雨は小降りとなっており、その遥か先に大きなアーチを描く虹が見えた。
電車が完全に止まり、ゆっくりとドアが開く。
すると、今まで微動だにしなかった人々はおもむろに動き始め、ドアの出口へと向かっていく。
老若男女、様々な人々が猫背の姿勢で歩いて行く姿は不気味に感じられた。
自分もここで降りるべきなのだろうか。
気が付いたら、車内は自分一人だけとなっていた。
このまま一人でいたらどうなるのだろう。
どこかまた、得体の知れない所へと連れて行かれるのではないか。
そう思うと少し怖くなったので、自分も立ち上がり開いたドアへと向かって行く。
人々が降りていく先は、少し寂れた駅だった。
正面に大きな看板が掲げられており、その下には人々が向かって行く下り階段が、そしてその両脇には人が3人程座れそうな木のベンチが左右にそれぞれ一つずつ配置してあった。
看板にはこう書かれていた。

ー黄泉駅ー

筆で荒く書き散らかされていた。

だが、確かにそう書かれていた。
・・・不気味な名前だ。
黄泉といえば、死んだ人が行くというイメージだ。
・・・まさかな
自分の中に一つの可能性が思い浮かんだが。頭をふりその考えをかき消す。
そんなことあるわけない。
さっきまで俺は美希と一緒にいたんだ。
・・・じゃあ何で、ここに美希はいないのだろうか。
分からなかった。

人々はゆっくりとした足取りで、階段の方へと向かって行く。
自分もあそこに向かった方がいいのだろうか。
そう思ったが、この寂れた駅の名前を思い出してぞっとする。
・・・もしかしてここはあの世と現世をつなぐ場所なのだろうか。
そんな馬鹿馬鹿しいことがあるものか。
そんなものは架空の存在だ。
そう自分に言い聞かせてみるものの、それにつながる根拠がこの場所から全く発見することができなかった。

とりあえず。
ドアの入口で立ち止まっている訳にもいなかったのでとりあえず電車を降りる。
すると、

目の前に一人の少女が後ろで手を組んで立っていた。
その少女は俺の顔を見て楽しそうに笑っていた。
・・・何だこの座敷わらしみたいな女の子は
第一印象がそれだった。というか、それ以外の表現が思いつかなかった。

ああ、日本人形っていう例えもあるか。
「・・・あの、何か俺に用があるのか？」
自分の顔を見つめている少女に問う。
実を言うと、自分は子供が苦手だった。
別に嫌いって訳ではない
子供の前だとどういう言葉を使えばいいのか分からないからだ。
だから、今の自分の言葉は少し威圧的に聞こえてしまったかもしれない。
なんて不器用なんだ、俺は。
心の中でつくづくそう思う。
しかし、俺のネガティブな考えに反して、少女は目を見開いてびっくりした後に、とても嬉しそうな顔をした。
「・・・すごい」
少女が呟く。
何がすごいのか、自分にはさっぱりだった。

・・・そういえばこの女の子どこかで見たことがあるような。
ふと、そんな錯覚を覚えた。
でもどこで会ったことがあるのかいまいち思いだせない。
でもあの独特のおかっぱの髪型とくりっとした大きな目は、他の子どもにはなかなかない特徴だからなあ。
そう思って、改めて少女を見る。
少女は、その大きな目を左右に泳がせながら両手で着物の巻く部分をおさえていた。
興奮をおさえようとしているのだろうか。
「あの！あのねっ・・・」
少女の声には驚きと嬉しさの交じったものが感じられた。
そして、あの、えーとと呟きながら次の事を聞いてきた。
「あの・・・お母さんは居ませんでしたか？」

電車の外

お母さん？
なぜこんなことを聞いてくるのだろうか。
・・・もしかすると待っているのだろうか。
そう思いちらっと少女の顔を見る。
その顔には期待に満ちているものが感じられた。
そんな期待をされてもと思う。
なぜならば、自分はこの子の親の顔を知らないし、それに例え一緒に乗っていたとしても自分以外の皆は階段へと向かって行ってしまったのだ。
つまり今自分が乗ってた電車の中に母親はもう居ない。
「・・・お母さんは、どんな顔をしてるんだ？」
しかし、もしかすると一緒に乗っていたかもしれないという好奇心から少女にそんな事を聞く。
すると少女は手を顎に当て少し考えるような仕草をした。
まるで探偵みたいだなと思いながら見つめていると少女は
「わかんない」
とあっけらかんとした表情で答えてきた。
「そんなんじゃ、誰がお母さんか分からないんじゃないか？」
素直にそんな疑問を抱いたのでぶつけてみる。
「大丈夫、分かるもん」
少女は少しだけ頬を膨らませてムキになったように答える。
・・・大丈夫という根拠がどこから来ているのか。
そんなことを思う。
「じゃあ、何でお母さんを待ってるんだ？」
そう聞くと、少女は先ほどとは一転して電球のような明るい表情となる。
そして、

「温かいからだよ！」
と全力で言ってきた。
・・・駄目だ、この子の言ってることがよく分からん。
「その温かいっていうのは？」
正直この時点で自分が納得できるような解答は、この少女からは得られないと思っていたが念の為に聞いてみる。
「その、温かいっていうのはどういう意味？」
「そのまんまの意味だよ？」
当たり前のことを何聞いてくるの？という憮然とした表情で答えてくる少女。

・・・なんだか腹が立ってきたが、相手は子供だ。
そう子供だ。
自分に言い聞かせる。
とりあえず話してると疲れるからさっさと切り上げてしまおう。
なんだかこの少女と話していても自分が疑問に思っていることは何一つ解決しない気がしてきた。
「そっか・・・よく分からんけど。お前のお母さんは車内には居なかったぞ」
ちょっと残酷なようだけど事実を伝える。
すると少女は見るからに捨てられた子犬のようなしょんぼりとした表情となる。
・・・面白いなこの子。
たった少しの間話しただけなのに、喜怒哀楽の色々な表情を見ることができた。
この少女は少しおかしいだけで、根はとてもいい子なんだろうな。
そう思う。
・・・何か美希みたいだな
と頭に美希の名前がよぎる。
そうだ、自分が聞きたかったこと。

「なあ俺の妹らしき人を見なかったか？」
しょんぼりと俯く少女に尋ねる。
「えっ？」
つむじをこちらの方に向けていた少女は頭をおもむろに上げ、顔をこちらの方に向けてくる。
少し困ったような顔をしていた。
「えーと、どんな人なの？」
そう少女に聞かれ、そうだ言わなきゃ分からんわなと自分で自覚する。

美希の顔。
それを思い出す。
そうしようとするとあいつの色々な顔が頭の中に浮かんでくる。
楽しそうに喜んでいる表情。
少しだけ気だるそうに外を見つめている表情。
最近見た表情につれて、頭の中での色彩が濃いものとなり明確な映像として頭の中に流れてくる。
とても心配そうにしている表情。
・・・これは自分が就職することを打ち明けた時。
何か思いつめている表情。
この表情は、両親が死んでからよく見かけるようになった。

あの散歩している日、車椅子を引いている自分を見上げてきた時の表情。
・・・あれ？
あの時あいつはどんな顔をしていたっけな。
必死に頭を使って思いだそうとする。
だけど何故か、顔の部分だけ少しだけ白い靄がかかったようになっていた。
しかしその靄はすぐに美希の顔の部分から消え去る。

『私、お荷物になってない？』
あの日自分にそう聞いてきた時の美希の表情は
悲しそうだった。
『何言ってるんだそんな事ある訳ないだろ』
そんな美希の表情をこれ以上見たくなかったからかもしれない。
自分は条件反射でそう答えていた。

「あの、お兄ちゃん？」
目の前の少女が首を傾げながら、声をかけてきた。
その瞬間に、自分にとってよく分からないこの世界へと引きずり戻された。
もしかしたらここは空想で現実じゃないのかもしれない。
けれどもそれにしてはリアリティがありすぎると思った。
「えーと、黒い髪が肩までかかってるんだよ。あと鼻が少しだけとんがってて目は垂れてて。背はこんぐらいなんだ」
そう言って俺は少女の頭より十センチ上で手を水平にする。
「むむう・・・」
その言葉を聞いた少女は腕を交差させて眉をよせて考え込んでしまった。
しかし、数秒後に
「・・・私分からないから、あっちのおじいちゃんに聞いてみて？」
と自分から見て左の方へと指を差した。
その先には、シルクハットのような帽子をかぶったスーツ姿の男性が石像のように佇んでいるのがぼんやりと見えた。
線路のちょっと外で何をしているのだろうか。
そんな事を思ったがそれはとりあえず後だ。
今は状況を確認するのが先だ。
頼れる人はもうあの人しかいない。

そう思って藁をもすがる思いで男性の元へと歩みを進めていこうとした。
が、自分の中で思い留まる
・・・忘れてた。
自分は反転し少女の元へと歩み寄った。そして
「ありがとな」
そう言いながらこの子の頭をくしゃくしゃに撫でた。
この子は俺の為に精いっぱい考えてくれたからな。（一応）
お礼は言っとかないとな。
「・・・えへへ」
少女ははにかんだ笑顔だった。
その明るい笑顔は、太陽よりも眩しいと言っても遜色ないぐらいのものだった。
その笑顔を見て自分は心を和ませた。
そして改め、男性の方へと歩みを進める。
二十メートルくらい近づいてから、男性がこちらの方へと顔を向けるのが分かった。
しかし霧が濃いために顔の細部まではまだよく見えない。
十五メートル・・・十メートル
徐々に近づくにつれてシルエットが明らかになってくる。
男性は老人のようだった。深く帽子をかぶっているため目は見えなかったが顔にしわが頬と目の下に何本か刻まれていた。
そして何だか近づきにくいような、そんなオーラを醸し出しているのを感じた。
「あっ・・・」
相手を観察しながら近づいていったらいつの間にか老人との距離は一メートルあるかないかになっていた。
この時は相手は自分の目を真っすぐに見つめてきた。
自分は目を反射的に反らしてしまう。
・・・なんて切り出せばいいのだろうか。

先ほどの少女のように話しかけれる気がしない。
元々自分は人見知りするタイプなのだ。
「・・・どうかしたのかい」
黙って見つめていた男性がふと切り出す。
恐らく相手も俺のことが気にはなっているんだろう。
「あの、聞きたいことがありまして・・・」
たどたどしい口調で自分は
「・・・妹を知りませんか？」
目の前の男性にそう尋ねた。

清孝

「おかあさん、おかあさーんっ」
少しだけ鼻歌を交えながら、桐乃は線路の近くでボールを付き続けていた。
どれくらいやるんだろうか。
その様子をボーッと見ていた自分はそう思った。
ベンチに寄りかかる。
すると、ギシッと木が軋む音がし、慌てて前のめりになる。
隣に座るスーツ姿の男性もその様子に少しだけびっくりしていた。
「・・・まだ実感が湧かないか？」
スーツの・・・名を益田清孝と名乗った男性に声を掛けられる。
「・・・はい」
自分は力なくそう答える。
結局自分が知りたかった、妹の所在については清孝さんも知らないようだった。
だけど代わりと言っては難だけど、この自分たちが居る場所について教えてもらった。
ーこの駅は現世とあの世を結ぶ中間点であるということー
ー自分と一緒に電車に乗っていた人達は、死んでいる人々であり自分もその中の一人であることー
また、清孝さんとボールを付き続けている桐乃のことについても教えてもらった。
清孝さんは階段の向こう側・・・つまりあの世に行ってしまったであろう孫を待っていること
桐乃は自分のお母さんをああやってずっと待ち続けていること。
色々なことを聞いた。
しかしこれらの情報には自分が常識では信じられないものもあり、

頭の中はパンクしそうだった。
だけど、今自分がどういう状況であるか整理したかったため必死に自分の中の常識という名の壁と戦いつつ聞き続けた。
「はあ・・・」
結局今自分がここにいるのは死んでしまったから、というのが今の自分にできる最大限の整理だった。
しかし、死んだという実感が全く湧いてこないのだ。
自分はどうやって死んでしまったのか、考えても全くイメージが湧いてこなかった。
・・・全く訳が分からない。
自分はそう一人ごちてため息をついた。
「修一君は・・・」
突然横から声を掛けられびっくりする。
横をみると自分と同じように背中を丸めて座っている清孝さんがこちらの方を見ていた。
「・・・なぜ妹さんを待つんだい？」
深いしわの上にある瞳には何故だか分からないが、強い意志のようなものが感じられた。
「なぜって言われても・・・」
いざ改まって聞かれると返答に窮する。
そういえば考えたことがなかった。
なぜ今、妹を待っているのか。
先程までは、一人で居る不安からか美希を探し求めていた気がする。
しかし先ほどまでに比べると自分の頭の中は大分整理された。
そしてここには清孝さんと桐乃という人達がいる。
精神的にもかなり安定していた。
それならば他の理由がなければ待つ必要がないのだ。
それでもここで待っているのは・・・
「やっぱり、会いたいからです」
そう答えた。

「あいつは今現在の自分にとっては大事な血の繋がった家族ですし」
もちろんあいつにとっても俺は大事な家族だろう。
そう思ってふと考える。
・・・美希は今どうしているのだろうか。
恐らく泣いているのだろう。病室の白いベッドの上で。たった一人で。
美希が泣いている姿を想像すると喘息の発作のように胸が苦しくなった。
すると、美希に会いたいという想いがさらに強くなった気がした。
美希にはもっと生きて幸せな人生を送ってほしいと思う反面、ここに来て美希の笑顔を見たいという二律背反な想いが自分の中で渦巻く。
「そうか、君も桐乃と同じか・・・」
俺の返答に対し、清孝さんは自分に羨望の眼差しを向けてくる。
・・・桐乃と俺が一緒？　なら・・・
「清孝さんは同じじゃないんですか？」
心の中で疑問に思ったことをそのまま口の外に出す。
「・・・確かに会いたいという気持ちは君たちと同じだ」
でも、と清孝さんは言う。
「私は君たちみたいに真っすぐではないのだよ」
悲しそうな顔をして清孝さんは弱弱しく呟いた。
そしてふうっと小さいため息をついて木のベンチの背に寄り掛かる。
肩の力を抜いて休憩するように座る。
清孝さんの顔は線路を横断したずっと向こうの方へと向いていた。
瞳はどこか遠くの、ここからは全く見えない場所を見つめていた。
そんな安静な姿勢をしばらく自分は見つめる。
何だか悲しそうだ。
そう思った。
「うぐっ！・・・」
突然。

清孝さんが呻くような声をあげ頭の側頭部を手でおさえながらうずくまった。
いきなりのことに、自分は少しだけパニックになる。
「・・・大丈夫ですか？」
思わず駆け寄ろうする。
しかし清孝さんは自分を手で制した。
「・・・大丈夫だ。発作のようなものだ」
声の語尾が少しだけ震えていて全く大丈夫そうに聞こえなかった。
しかしそう言われた手前、自分はうずくまる清孝さんを前に何もすることができなかった。
うぅ・・・あぁ・・・と小さい声を上げ続けて数十秒経った後。
どうやら発作は収まったようで、ふぅと大きな息をはいて清孝さんはベンチの背もたれへと寄りかかった。
この時。
自分は一瞬だけ不安な気持ちに襲われた。
なぜならば。

清孝さんがこの時瞳孔が開いているように見えたからだ。

たった一瞬だった。
けれども自分にはそれが見えてしまった。
まるで自分が乗ってた電車に居た人々のようだった。
・・・何を考えているんだ自分は。
頭の中に浮かんだわずかな可能性を振り払う。
この人はあの人たちとは違う。あんな風に全くしゃべらないわけじゃないし、生気に満ち溢れている。
自分はある可能性を考えたことを、清孝さんに対して失礼であると言い聞かせすぐに頭の中から消し去る。
「・・・本当に大丈夫ですか」
「ああ、大丈夫だ」

そう言っている清孝さんは目も元通りになっていた。
そうだ、さっきのは気のせいだ。
しかしさっきに比べて少しだけ寂しそうな雰囲気が感じられた。
「あの・・・」
自分は心の中で引っ掛かっていたことを言う。
それはさっきの清孝さんの発言についてだ。
「別に会ってはいけないなんてこと、ないと思います
清孝さんは孫の・・・七海さんに会いたいからここに居るんですし」
上手い事励ます言葉が見つからなかった。
なぜこの時自分は清孝さんを励まそうと考えたのか。
それは清孝さんが孫の七海について話している時に、目も何だか輝いていて楽しそうであったからだ。
その様子を見て自分は孫にとても会いたいんだなという気持ちを感じた。
それなのに会ってはいけないと自分で自虐的に言っていた。
自分はそれを見て少しだけ寂しい、そう思った。

上手く励ませればと思ったのだけれど駄目だ。自分は口下手だ。
「すいません、こんなこと言って」
「いいや、ありがとう」
こんな自分の言葉に清孝さんはありがとうと言ってくれた。
何だか嬉しくなった。
「ねえねえ、2人とも。遊ぼうよ」
いつの間にか桐乃がボールを抱えながら不満そうに駆け寄ってきた。
でも・・・もう少しだけ清孝さんに話を聞いてみたい。
そう思いちらっと清孝さんの方を見る。
すると清孝さんは早く行けといわんばかりに、しっしと手首でやっていた。
「修一君と遊んでもらいなさい」
清孝さんは少しだけくたびれたように桐乃に言った。

その様子を桐乃は少しだけ心配そうに見ていた。
恐らく桐乃も知っているのだろう。
清孝さんに定期的に発作が起こることを。
だけど清孝さんは目で、大丈夫だから遊んできなさいと訴えかけてくる。
それを汲み取ったのか桐乃は俺の方を見て首を縦に振る。
「遊ぶか」
桐乃が抱えていたボールを手に取り、線路の近くへと2人で走っていく。
恐らく清孝さんは何か考えたいことがあるのだろう。
そう思った。
「よし、サッカーでもするか！」
「うん！」
2人でそう言いあいボールを蹴り合う。
その時に、遠くのベンチの方から
「桐乃を頼むよ・・・」
と小さい声で呟くのが聞こえた。

どういう意味なんだろうと最初は思った。
しかしこの意味は後になって思い知らされることになるのを自分はこの時まだ知らなかった。

異変

桐乃を頼む

清孝さんのあの言葉の意味を俺は今実感させられている。
なぜならば清孝さんは

この駅から居なくなってしまったからだ。

清孝さんとの会話の後。
あの後から清孝さんは少しずつおかしくなっていった。
最初は時々ぼーっとしているな、と思う程度だった。
しかし次第に口数は減っていき、自分たちが話しかけてもその後に言葉が続くことが少なくなっていった。
そして身体が鉛のように重くなったのか、清孝さんはベンチに座りっぱなしの状態でいることが多くなった。
次第におかしくなっていることは自分も桐乃もこの時から気づき始めた。
だから、色々なことを試した。
清孝さんにクイズを出したり、トランプで神経衰弱をしたり。
自分たちにできることを精いっぱいした。
けれども、症状は徐々に重くなっていった。

そして昨日の出来事。
あの時に自分は衝撃を受けた。
なぜならば

清孝さんも電車に乗っていた人達と同様に目が虚空をさまよっていたからだ。

これを見た瞬間自分は身体が凍りつくのを感じた。
もう清孝さんは自分たちの元から居なくなってしまうのではないかという不安がひと際大きくなった。
そんな清孝さんに桐乃が話しかけた。
『おじいちゃん、大丈夫？』
すると、今まで一歩も動かなかった清孝さんがゆっくりと桐乃の方へと顔を向けた。
今まで反応がなかったのに、こんな事が起こったため桐乃は少しだけびっくりしていた。
そしてゆっくりと口を開いた。
『七海・・・』
清孝さんは桐乃の方を虚ろな目で見つめながら孫の名前を呼んだ。
清孝さんは前話した時、桐乃と七海は似ていると言っていた。
もしかして間違えているのだろうか。
『おじいちゃん、私は桐乃だよ？』
間違いを訂正するために桐乃が清孝さんに問うた。
しかし桐乃の言葉を清孝さんは全く聞いていなかった。
『七海・・・すまない。私はお前に会う資格などないんだ』
懇願するように桐乃に問いかけるその姿は、自分をとても悲しくさせた。
今まで一緒に居たのに。
もう見分けがつかない程の精神状態になっているのか。
そしてその気持ちが更に強いのは桐乃の方だった。
桐乃は悲しさを通り越して泣きそうな顔をして清孝さんの虚ろな目と向き合っていた。
『おじいちゃん・・・』

桐乃のその言葉には自分が自分であると認識していないことに対する寂しさと。
そして会いたい人に対して罪悪感を持っている清孝さんに対しての悲しみを感じとることができた。
しかし、桐乃はそれでも清孝さんに対して真っすぐに向き合った。
桐乃は清孝さんの方へとゆっくり歩み寄り、頭を撫でた。
『おじいちゃんが・・・謝る必要ないよ・・・』
と必死に悲しみの表情をこらえつつ、笑顔で言った。
『七海・・・』
ろれつの回らない状態で名を呼ぶ清孝さん。
清孝さんは歩み寄ってきた桐乃を抱きかかえて
『ありがとう・・・七海・・・』
虚ろな瞳から安堵の涙を流していた。

自分たちが生きていた頃の世界に夜が来るように、この駅にも夜が来る。
ここに来てから自分は体内時計で大体の時間を把握するようになった。
その体内時計の基準の一つが睡眠だった。
桐乃は既に自分の膝の上でスースーと寝息を立てつつ寝ていた。
そして自分もまどろみ始めていた。
清孝さんはあの会話以来、全くしゃべらなくなった。
話しかけても電車の中に居た人達のように何も答えてくれない。
自分は清孝さんはもうすぐあの世へと向かっていくのだろうと心の中でそう思った。
もう今夜を過ぎたら清孝さんは居なくなってしまうのではないか。
そんな不安に駆られた。
『清孝さん・・・』
自分は話しかける。

しかし、隣にいる清孝さんは虚空を見つめたまま全く答えてくれない。
だが、自分は心の中である一つの感情が湧いていたため話を続ける。
『清孝さんは自分で孫の七海に会ってはいけないと言っていましたけど』

『自分はそうでないと思います』
清孝さんが自虐的に、会ってはいけないと言ったあの時。
自分は何故かとても悲しい気持ちになった。
会いたいのに会ったら駄目だと決めつけること。
狂おしいほど会いたいのにそれを自分の主観で会ってはいけないと決めつける。
どれだけ苦しいことだろうか。
清孝さんはそんな気持ちで孫を待っていたのだろうか。
自分がもしもそんな立場だったらどうなるんだろう。想像するだけで苦しくなる。
だからかもしれない。
自分が清孝さんに対して慰みの感情を持ったのは。

『会いたいという気持ちが強いのならそれに抗わず、会うべきです』
自分の中で引っ掛かっていたものを吐露する。
しかしこの時気付いた。
自分は前もこんな事を言っていたし、桐乃も言っていたのだ。
きっと同じことを何回も聞かせるなって思ってるんだろうな。
そう思い少し恥ずかしくなった。
『すみません、偉そうに言って』
自分の意識はもう眠気で飛びそうだった。
『おやすみなさい』
そう言って目を閉じ、闇の中へと意識を沈めていった。
深い闇の中。

そこでふと外の方から
『ありがとう』
そんな声が聞こえた気がした。

起きた時。
ベンチに清孝さんの姿はなかった。
桐乃は清孝さんが座っていた場所を悲しそうに見つめていた。
「ねえ、修一」
「おじいちゃんはどこに行っちゃったの？」
その悲しみの表情を俺の方に向け言ってくる。
「さあ、分からない」
自分は桐乃の方を見やる。
そして
「孫に会いに行ったのかもしれないな」
そう自分は呟いた。
「・・・そうなんだ」
桐乃は納得のいかなさそうな顔だったが、すぐに明るい笑顔を作った。
「じゃあおじいちゃんは、きっと今幸せなんかな？」
「かも知れないな」
自分がそう言うと、桐乃は悲しみをこらえながら笑った。
「・・・そうだよね、幸せになったんだよね」
そう言うと、ボールを抱えて線路の方へと走っていく。
「しゅういちー！遊ぼうよー！」
遠くの方で手を振っている桐乃。

・・・そうだな。
清孝さんは会いたい人に会えたのだろうか。

もしも会えていたのならきっと、幸せなんだろうな。

「今すぐ行くから待ってろー！」

そうだ、ここから居なくなることはあの人にとってもいい事なんだ。
そう自分に言い聞かせて桐乃の方に大声を出して走り出そうとする。

パサッ・・・

「ん・・・？」
すると後ろの方から何かが落ちたような音が聞こえてきた。
振り向くとベンチの下にノートのような物が落ちていた。
自分はそっちの方に向かって行く。

「しゅういちー！早くー！」
後ろから声が掛って来る。
「後で行くから今は一人で遊んでてくれー！」
自分がそう言うと、遠くで桐乃がフグのように頬を膨らませているのが分かった。
しかし今はそれよりも、ノートが気になって仕方なかった。
ノートを手に取ってみる。
角はボロボロになっており、相当古いものであることが推測された。
最初の一ページを開く。
そこにはこう書かれていた。

○月○日

今日から日記をつけることにした。
これはこの後にここに来るであろう人には参考になるであろう。
どうか、これを手に取ってくれた人はぜひ読んでほしい。

日記

これはもしかして清孝さんの日記なのだろうか。
自分は気になって次のページをめくってみる。

○月○日
ここには時間の概念というものがあるのだろうか。
しかし、自分にはこの場所というのはよく分からない。
だがすることもないのでとりあえず日記をつけることにする。
今日は七海と2人でクイズを出しあったり、トランプをしたりして遊んだ。
七海が不安そうにしていたのでそれを和らげてやりたかったのだが、なかなか難しい。
現に私にもこの場所というのがよく分からないのだ。
だからゆっくりとじっくり七海に安心というのを与えていければよいと思っている。

どうやらこれは清孝さんの日記のようだ。
この文章の中から自分が会ったことのない名前が読み取れる。
この内容を見る限り孫の七海と一緒にここにたどり着いたようだ。
自分は次々とページをめくっていく。

○月○日
目的もなく日々を過ごすというのは苦しいものだ。
しかし、七海はそんな事を微塵も考えていないのかいつも通りに遊んでいた。
それでいい。

七海は何も考えず私の傍にいてくれればいい。
それだけで私は幸せなのだ。

穏やかな日常の様子がその日記には書かれていた。
しかし、そこから数ページ程過ぎた時から内容が少しずつ変わっていることに気づく。

×月×日
今日七海の様子が少しだけおかしかった。
私が話しかけても数秒後に反応するような。
寝不足なのだろうか。
そう思い、今日一日は七海を自分の膝の上で寝かしてやっていた。
なんだろう。
何だか嫌な予感がする。

○月○日
分からない、私には。
七海がどんどんおかしくなっていく。
最近の七海は瞳が虚ろであることが多くなった。
しかも、私が話しかけても言葉を返してくることも少なくなった。
七海、私が嫌いになってしまったのか。

どんどんとページをめくっていく。
それらには孫の七海がどんどんおかしくなっていく様子が清孝さんの文章から感じ取ることができた。

×月×日
今日も七海は虚空をさまよっている。
怖い。あの無垢な笑顔を見せていた七海を失うことを。
そのためには私は七海が楽しくなるであろうことを何でもした。
しかしどれもこれも無反応だった。
どうすればいいのだ。
私は今。無力感に苛まれている。

つらかった。清孝さんが苦しいのを感じ取ることができる文章を読む事が。
しかしページをめくる手は止まらなかった。
そしてあるページで自分は手を止めた。

○月○日
七海は行ってしまった。
あの子はもしかしたら、私の事を必要としていなかったのかもしれない。
彼女は、母親を求め続けていた。
私にとって孫が喜ぶ姿は自分の生きる全てだった。
それを失った今、私はどうすればいいのだろう。

読むだけで胸が詰まりそうだった。
自分が生きがいだった人からの拒絶。
それほどきついものは早々ない。
もしも美希が自分のことを拒絶するのだとしたら、自分は悲しさで

胸がいっぱいになるだろう。
『ねえお兄ちゃん？』
『私の事、好き？』
ふと、散歩している時にしていた会話が頭の中をよぎる。
しかし、美希の顔は・・・思いだそうとしても白い靄がかかったようになって見ることができなかった。
だがあの時の美希は少しだけ寂しそうな声を出していた。
もしかして美希は俺が拒絶することを怖かったのかもしれない。
自分が俺の足を引っ張っていると思って。
そしてあいつにとっても俺は大切な人だったのかもしれない。
・・・会いたい。俺は美希に会ってやりたい。
そしてここにあいつが来た時に俺は、大丈夫だよって言ってやりたい。
けれどもあいつに会うためには俺は待つことしかできないのだ。

「しゅーうーいーちー！まーだー！？」

桐乃が遠くで俺を呼んでいる。
日記には、清孝さん自身が桐乃に出会い救われたことも書かれていた。
そして、自分が徐々に弱っていく様子も細かく書かれていた。
最初は頭がボーッとする感じになり、身体が徐々に動かなくなっていく。
そして最終的には七海のように自我が保てなくなるということが書いてあった。
自分たちにもいずれそれは訪れるだろう。
それまでに、自分は美希に会えるのだろうか。
清孝さんの日記を自分は読み耽っていた。
そして最後のページにはこう書かれていた。

○月○日
私はもう駄目だ。
日記を書くのもこれが最後になるであろう。
頭の芯が熱にやられたようになり、考えることもままならない。
直に私も七海と同じ廃人のような状態になるであろう。
桐乃。
彼女は私を絶望から救ってくれた恩人だ。
しかしそんな彼女もいずれは意識がなくなって話すこともままならなくなるだろう。
私にはそんな彼女を想像できないし、したくもない。
だがそんな心配も杞憂だ。
そんな彼女を見る事なく自分は逝くのだから。
・・・もっとたくさんのことを教えてやりたかった。
しかしもう無理だ。
修一君。
もし、君がこれを読んでいるのならどうか私の最後のわがままを聞いてほしい。
彼女はまだ子供だ。
徐々に身体がおかしくなっていく過程で不安を感じることも多くなるだろう。
その時はどうか、彼女の傍にいて不安を和らげてあげてほしい。
そして願わくば。
彼女を最後まで見届ける勇気があるのなら。
どうかずっと桐乃の傍にいてやってほしい。
よろしく頼む。

最後の方は身体が言う事を聞かないせいか文字がぐちゃぐちゃになっていた。
けれども清孝さんの真っすぐな想いは文字を通して心に突き刺さった気がした。
ページにグレーの模様がポツポツとあるのに気付いた。
・・・自分は泣いているのだろうか。
目の前が涙で滲んで文字も滲んで見える。
何で自分は泣いているのだろう。
分からなかった。
悲しみか哀れみなのか分からないがそれが自分の身体にため込まれて、そして涙として放出されたのかもしれない。
ただ、この年になって涙を流すことは初めてだった。
両親の死の時も涙を流せなかったというのに。

清孝さんの願いは俺が桐乃と一緒に居てやること。

こんな弱い自分が、桐乃が弱っていく様子を見つめつつ励ますことができるのだろうか。
分からない。
けれどもここに書かれている清孝さんの心からの願いを自分は見逃すことができるきがしなかった。
「ポーン、ポーン、ポーンっと」
線路の近くで桐乃がボール遊びをしている。
・・・あの子から笑顔が失われるのを耐えられるのだろうか。
正直に言ってできる気がしなかった。
けれども清孝さんの願いは聞いてやりたい。
不安そして使命感という二つの感情に自分は揺さぶられていた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3331z/

霧の中で待つ少女

2012年1月9日19時46分発行